

「藪の中」の言説分析

篠 崎 美生子

Discourse Analysis of “Yabu no Naka”

Shinozaki Mioko

1.

芥川龍之介の「藪の中」(T 11・1)は、一般に、一つの殺人事件をめぐる七人の証言からなる小説だとされているが、それは果たして疑いようのないことなのだろうか。

確かに、「検非違使に問はれたる木樵りの物語」から「多襄丸の白状」までは、同一の検非違使に対する連続した証言であることが類推される。しかし、その次の語り手である「清水寺に来れる女」は、それ以前に語られた事件の被害者「真砂」なのだろうか。また、「死霊」とは「武弘」の霊であり、「清水寺に来れる女」の夫の霊なのだろうか。それを確実に保証する言葉は、小説の中のどこにもない。

にもかかわらず、通常、「清水寺に来れる女」＝「真砂」,「死霊」＝「武弘」として疑われないのは、この小説を読みつつある読者が、一種の求心力——互いの関連を保証されていない語りの群に、同一の事件に関する語りとしてのまとまりを与えようとする欲求——を働かせているからに違いない。

尤も、小説を読むとは、単なる文字の羅列からまとまった物語世界を想像する営みだから、「女」＝「真砂」,「死霊」＝「武弘」へと想像を進めるのは、「読む」ルールにかなったことなのかもしれない。しかしこの場合、七つの語りを一つの事件についてのものとしても、語りの集積からまとまった事件の像がつかめるわけではない。殺人者や殺人動機などについて、各語りは大きな食い違いを見せているのだから、七つの語りを一つの事件に関するものとする判断は、かえって別の大きな謎を呼び寄せることにもなるわけだが、なぜかその前提は疑われない。そればかりか、大半の読者はその謎を踏み越えるようにして、小説の中に事件の「真相」や証言の矛盾の「意味」を求めようとする。求心力が強烈に発揮された結果である。

過去の膨大な量の「藪の中」論のほとんどは、今述べたように「真相」や「意味」を求める方向で書かれている。例えば、当事者三人の語りのうちのどれかが「事実」を語ったものであとは嘘だと考えたり、各語りの一部ずつに「事実」が語られているとして、その部分の集積か

ら「真相」を構成するもの。或いは、「事実」レベルの「真相」はわからないとした上で、わからなさ自体に、作者の懐疑主義や女性不信といった超越的な「意味」づけをなすものである。

「意味」づけは、「事実」の解明を断念した論者が別の位相で求めた「実」——「真実」と言ってもよい。とすれば、これらの論は、「言葉」はなんらかのやり方で必ず「実」（事実・真実）と結びついている、とする点で共通しているように思われる。本来「虚」（フィクション）であるはずの小説の「言葉」に「実」を求めるとするのは奇妙なことだが、「藪の中」を読む際に働く求心力には、この発想が大きく関わっていそうである。

それにしても、この強い求心力は一体どこから生じているのだろうか。本論では、この求心力を、テキストが生み出し促していることを論証するとともに、求心力の正体についても、同時代の言説を参照しながら考察したい。そしてその上で、「藪の中」の新しいとらえ方を可能にすることができれば、幸いである。

2.

先に、「検非違使に問はれたる木樵りの物語」から「多襄丸の白状」までは、同一の検非違使に対する連続した証言であることが類推される、と述べた。それは、「木樵り」「旅法師」「放免」「媼」の各語りに付されたタイトルに、「検非違使に問はれたる～」とあるばかりでなく、各語りの背後に、検非違使の問いを透視することができるからである。

例えば、木樵りの冒頭句「さやうでございます。あの死骸を見つけたのはわたしに違ひございません。」の前には、「あの死骸を見つけたのはお前か？」という検非違使の問いが下されていたことが想像できるだろう。また、木樵りの「太刀か何かは見えなかつたか?」「何、馬は見えなかつたか?」という問いを確認する言葉や、旅法師の「丈でございますか?」などの言葉からは、検非違使が、馬と太刀にこだわりつつ二人を尋問していることがうかがえる。おそらく検非違使は、放免が捕えてきた、馬と太刀を持つ男（多襄丸）の存在を意識し、その男を犯人に擬しつつ問いを発しているのであろう。木樵りや旅法師は、検非違使のそのような問いに答える形で、言わば、検非違使の想定する物語の片側を担う形で、言葉を発しているのである。

放免や媼についても、同様に、検非違使と物語を共有していることが指摘できる。

特に放免は、検非違使に情報を与えるばかりでなく、検非違使から情報を与えられてもいるらしい。「さやうでございますか？ あの死骸の男が持つてゐたのも、」と、太刀と弓矢の出所を確認する箇所や、「はい、馬も仰有る通り、法師髪の月毛でございます。」と、旅法師が見た馬と多襄丸が所有していた馬との一致を確認する箇所に、それは顕著である。ここで検非違使と放免は、情報を交換しあいながら、男を殺して馬と武器を奪ったのは多襄丸であるに違いないとの共通理解に達しているのである。

放免が、多襄丸が「女好き」で、「その月毛に乗つてゐた女も、こいつがあの男を殺したと

なれば、何処へどうしたかわか」らないと述べたことから、検非違使をとりまく語りの場には、「女」の問題が新たに浮上してくる。——と、そこには都合よく女の母である媼が登場し、「女」が殺された男の若い妻であることを語る。この媼も、これまでの問答、特に検非違使と放免のやりとりを聞き知っているようで、「何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。婿ばかりか、娘までも……」と語っている。ここでは既に、多襄丸は、「武弘」を殺したばかりでなく妻の「真砂」をもどうかした（殺したかもしれない）ものとされているのである。

この予想は、ただちに検非違使にも共有される。「多襄丸の白状」の冒頭は「あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。」であり、その前に、「お前は男と女を殺しただろう」という検非違使の問いがあったことが想像できるからである。このように、「検非違使に問はれたる木樵りの物語」から「多襄丸の白状」の冒頭にかけては、検非違使の問いによって、各語りが一定の方向付けをされ、逆に各語りも検非違使の次の問いを誘発していることがわかる。検非違使の問いと各語り手の言葉とは、まるでしりとりのように連鎖しあいながら、多襄丸が男を殺しその妻も殺したに違いない、という予測の物語へと、彼らを導いているわけである。

また、小説を初めから読み進めていく読者にとっても、ここまでは、読み進めるにつれて謎が解けていく快感を味わえることになる。死体の発見→武器と馬を所有し、女を連れた生前の男の存在→武器と馬を所有した盗人の逮捕→男と女は夫婦、の順で謎は次第に埋められ、最後に多襄丸が男女の殺害と武器、馬の強奪を認めれば、予想どおりに謎解きは完了するはずである。つまりここでは、小説の言葉そのものが、予定調和的に、求心的に配置されているのである。まずは、小説前半の語り自体の求心性²⁾を、読者の求心力を助長する第一の要因として挙げることができるだろう。

3.

しかし、多襄丸は検非違使たち（と読者）の期待を裏切り、「女は殺しはしません」と言う。検非違使たちは、男が殺されている限りその妻も必ず被害（殺害）にあっているはずだとの前提のもとに、多襄丸による夫婦殺害という予測の物語を思い描いていたのだった。が、この前提はこうしてあっけなく崩れ、求心的な展開は挫折する。しかも、多襄丸によれば、「男を殺さずとも、女を奪う事が出来」た彼が、目的を達した後で敢えて男を殺したのは、多襄丸と男の「どちらか一人死」ぬことを女が要求したためであるという。男に従い、男の庇護がなければ生きられないはずの女、気の毒な被害者であるはずの女の像も、ここに潰えてしまうのである。

小説は、この後も決して求心的な展開はしない。「清水寺に来れる女」＝「真砂」、「死霊」＝「武弘」と仮定してあとの二つの語りを見ると、真砂は、夫の蔑みの視線に耐えられずに心中を企て、「殺せ」という同意の言葉を得た上で夫を刺した、と言う。また武弘の霊

は、手ごめにあったあとの妻が、盗人の妻になることに同意した上に、盗人に自分を殺させようとしたことに絶望を感じ、自殺した、と言う。「多襄丸の白状」以下の三つの語りでは、殺人者・殺人動機が全て異なっており、これらの言葉を全て活かしながら一つの事件の像を組み立てることは絶対に不可能になっている。

小説前半の求心力に誘われて読み進めた読者は、混乱³⁾せずにはいられない。「清水寺に来れる女の懺悔」以降では、それまでは疑いようのなかった、多襄丸が男を殺したという「事実」さえ、保留を余儀なくされてしまう。「藪の中」の「意味」するものとしてこれまで語られることの多かった作者の「懷疑主義⁴⁾」といったものも、あまりにも異質の語りが混在することに対する、読者自身の絶望感が呼び寄せた解釈なのだろう。

だが、これら三つの語りは、果たしてそれほど異質なのだろうか。確かに各語りにおいて、殺人者・殺人動機は異なっている。しかし、なぜ男だけが死に女が生き残っているのかについて答えようとしている点では、それらは一致しているのではないか。女が生きているということは、「男が殺されている限り、その妻も必ず被害（殺害）にあっているはずだ」という検非違使たちの共有する前提からの逸脱を意味する。とすれば、女（妻）が、男に庇護されて生きるという女の役割を放棄し、男もまた、女を庇護（または所有）するという役割を果たしきれなかったこの事態に関し、各人なりの弁解がなされたのがこれらの語りだとは考えられないだろうか。

近年、「藪の中」を「真相」や「意味」において語るのではなく、語り全体に隠された（同時に読者にも共有されている）コードを掘り起こす形で読もうとする論文がいくつか現れ始めているが、その嚆矢となった高橋修氏の「＜暴力＞小説としての『藪の中』」には、多襄丸以下の三つの語り全ての中で、真砂が「性的欲望の対象」（モノ）として「見られ」る立場にある、との指摘がある。

女が男によって消費されたり所有されたりするモノである、と言う認識は、先に述べた検非違使たちの前提に通じるものがあるだろう。とすれば、多襄丸、真砂、武弘（の霊）の三人も、検非違使たちと同様に、「女は男に所有され、男と運命を共にしなければならない」という価値観^{コード}を共有していると言えるのではないか。そして、この価値観^{コード}にそって語られているという点では、七つの語りは全て質を同じくする、と言えるのではあるまいか。

4.

そこで、多襄丸以下の三つの語りが、前述の価値観^{コード}からの逸脱に対しどのような弁解をしているかを見てみよう。

繰り返しになるが、多襄丸によれば、彼は初めは「男を殺さず」に「女を奪う」つもりであり、実際にそれを成功させている。ここまでで終われば、多襄丸自身は前述の価値観^{コード}に違反することはない。ただ、多襄丸自身言うように、「女を奪」われた男の方が象徴的に「殺される」（男としての存在価値を失う）だけである。だが、実際にはこのあとで、多襄丸は男を本当に

殺してしまう。

あとの二つの語りにも共通する特徴だが、ここで語り手が殺人の罪から自分をかばおうとはしていないのは興味深い。むしろ彼らは積極的に、自ら手を下したことを認める。その代わり、それが他の誰かに促されてしかたなく行った行為であることを、併せて語っているのである。

多襄丸が男に殺意を抱いたのは、女が、「あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、(中略)そのうちどちらにしろ生き残った男に連れ添ひたい。」と言って多襄丸に縋ったからだという。多襄丸は太刀打ちの結果男を殺したと言うが、男が縛られた状態にあった以上、多襄丸がもっと簡単に男の命を奪うこともできたわけで、そうすると、男を殺したのは多襄丸だがそれを教唆したのは真砂である、という読み取りも可能になる。とすれば、多襄丸のこの語りは、殺人行為の罪を引き受ける代わりに、そのような不本意な殺人をしなければならなかったことや、男を殺してもなお、女を所有することも消費しきる(殺す、或いは妻にする)こともできなかった責任を、全て女にかぶせる語りだと言うことになるのではあるまいか。

真砂もまた、自分こそが手を下して夫を刺し殺した、と言う。しかし、そのそもその原因は、過失なくして手ごめにあった自分を「蔑み」「憎」む「夫の目の色」であり、しかも夫は「笹の落葉が、一ぱいにつまつた」「唇を動かし」て、「『殺せ』と一言云つた」のだと言う。夫を死なせた真砂は、今、自殺の意志はありながらそれを果たし得ず、清水寺の観音を頼るしかない状況にある。先に述べた価値観からすれば、女は自分の運命を決めることができないはずなのだから、夫がその役割を怠って早々に命を棄てた以上、死にきれないことの責任は真砂にはないと言えるかもしれない。これも多襄丸の場合と同様、殺人の罪を負う代わりに、それを仕向けた夫の責任、自分を死ねない状況に残した夫の責任を問う語りだと言える。

武弘(の霊)も、自殺であるとして手を下した責任は自ら負う。だが、自殺を余儀なくさせるほど「呪はしい言葉」を投げ掛けたのは妻であるとする。また、妻の運命を決めることが出来なかったのも、妻自身が自分との関係を断とうとした(盗人の妻になろうとし、盗人に自分を殺させようとした)ためであるとして、自殺の行為以外の全ての責任を真砂にかぶせるのである。

殺人の罪と引き替えにしてまでも、「女は男に所有され、男と運命を共にしなければならない」という価値観からの逸脱の責任を逃れようとするこれらの語りは、この価値観の束縛がいかに強烈であるかを示すものだと言えよう。そして、このように七つの語り全体が一定の価値観で貫かれて、「多襄丸の白状」以降も一種のまとまりをもっているということが、テキストから唯一絶対の「真相」や「意味」を得ようとする読者の求心力の発動を促す、第二の要因になっているのではないだろうか。

5.

ところで、このように一定の価値観に添った語りが並べられていることは、そのように各語りに手を加え、適宜に並べて読者に送り出している「編集者」とでも言うべき架空の機能を想定すると理解しやすいように思う。

「藪の中」の各語りには、例えば「検非違使に問はれたる〜」「清水寺に来れる女の懺悔」といったタイトルが付されたり、「(跡は泣き入りて言葉なし)」「(陰鬱なる興奮)」などのト書風の注記が施されているが、これらは、もとの語りに何者かが手を加えた痕跡として見ることができるだろう。その上、「清水寺に来れる女の懺悔」と「巫女の口を借りたる死霊の物語」の冒頭部分のダッシュ、及びそれぞれの末尾の「(突然烈しき歎歎)」「……」は、これらがもともとの語り（そんなものがあつたとすればだが⁷¹⁾）から一部分を引用してできあがったことを示している。つまり、各語りは「編集者」の手を経て活字化された記事のようなものである。とすれば、全ての語りが一定の価値観に貫かれているのは当然だろう。「藪の中」の読者は、言わば、この「編集者」に操られて求心力をかきたてられてきたわけである。

ここで改めて、「真相」「意味」探しの無効性は確認できた、と私は思う。が、読者の求心力をかきたててきた、各語りに共通する価値観の中身については、さらに考えなければならない。読者の求心力をかきたてる、ということは、それらが小説の語り手たち（或いは「編集者」）に共有されているばかりでなく、小説発表当時から現在までの大半の読者にも無意識に受け入れられてきた価値観であるはずだからである。

その価値観のひとつに、女性を抑圧する暴力があることは、既に確認した。が、それ以外にも、前段での考察から、「多襄丸の白状」以下の三つの語りについて、殺人行為よりも殺人教唆の罪を重んじる価値観を指摘することができると思う。いわば彼らは、「肉体」の罪よりも「精神」の罪を重んじているわけである。

「肉体」に対する「精神」偏重の価値観、として括ってみると、三人の語りの中からは、これを前提とするたくさんの言葉を抜き出すことができる。

まず「多襄丸の白状」には、検非違使を揶揄する一節があつた。彼は、「女を奪う」ために「権力」「金」「お為ごかし言葉」で（精神的に）「男を殺す」ことが可能であると述べ、自分のように「腰の太刀」で（肉体的に）「男を殺す」こととそれとでは、「どちらが悪いかわからない」と語っている。また、「女を妻にしたい」という欲望が、「卑しい色欲」ではないことを力説している。多襄丸にとって、単なる「色欲」は肉体に直結する蔑まれるべきものであり、「妻にしたい」という精神感情は尊ばれるべきもののだろう。

また、「清水寺に来れる女の懺悔」でも、「手ごめ」にあつたこと（肉体的に傷つけられたこと）自体の衝撃は全くと言っていいほど語られず、それは「夫はどんなに無念だつたでせう」と、夫の感情を問題にする言葉へとずらされている。その後、彼女を夫殺しへ駆り立てていくものも、夫の眼の「蔑み」「憎しみ」であり、そこから生じた彼女自身の「恥しき、悲しき、腹立たしき」といった精神的要因である。彼女が現在抱えているのは、死にきれなかった自分

の肉体そのものの問題であるはずだが、そのことについては「申し上げる力も」ない、として言及は少ない。

「巫女の口を借りたる死霊の物語」は、そのほとんどが精神偏重の言葉だと言ってもいい。ここでは、妻が手ごめにあったこと自体は全く問題にされておらず、男は、「盗人の言葉に、聞き入つてゐる」妻を見て、はじめて「嫉しさ」を感じたように語っている。男にとっては、「妻が犯されたことよりも、妻が別の男に気持ちを移したことが⁹⁾」問題であり、それこそが「妻の罪」なのである。また逆に、夫を殺してくれと頼む女を蹴倒し、「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事は唯頷けば好い。殺すか？」と彼に声をかけた盗人については、「俺はこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。」と語られている。「この言葉」に表れた盗人の精神——夫殺しだけは許容できないとする考え方——が、自分を騙し目前で妻を手ごめにした挙げ句、その妻をかどわかして連れ去ろうとした行為を帳消しにするほど価値のあるものとされているのである。

6.

この極端な精神偏重の傾向は、例えば、「藪の中」発表と同時期に阿部次郎が提唱した「人格主義」などとも似通っている。単行本『人格主義』（岩波書店 T 11・6 刊）にも収められた論文「人生批評の原理としての人格主義的見地」（『中央公論』T 10・1）で、阿部は「精神と物質とを区別して考える」ことを自明の前提とした上で、「精神」が「主」で「物質」が「客」若しくは「従」であると述べている。そして「人格とはこの精神であり価値の意味の主」であって、「肉体」等の「物質」とは一線を画すとする。「物は——私達の肉体と雖も——唯私達によつてもたれるものであるのに止まる」のだという。そして、そういう尊い「人格の成長と発展を以て至上の価値とな」すのが、「人格主義」なのだそうだ。

「人格主義」という名称を用いたのは阿部だけであるが、精神世界に全ての「本質」があることを信じる言説は、大正期に支配的なものであったようである。

当時はベルグソンや新カント学派の影響で、「生命」という用語が流行していたらしい。鈴木貞美編『大正生命主義と現代⁹⁾』は、「生命」という多義的な用語が「スーパー・コンセプトになっていた」「一九〇五年から一九二三年」の文化状況にさまざまな切り口からアプローチしたものだが、その中で永野基綱¹⁰⁾氏は、阿部の「人格主義」や西田幾太郎の「人は外に働き得ざる時には内に働くものなり」との言葉にも言及しつつ、大正生命主義とは、閉塞した時代状況における「実世界」から「想世界¹¹⁾」への動きの表れだと論じている。

普段隠され、抑圧されている「生命」が精神の内部に存在し、それを自ら発見し獲得することが、抑圧から自由になる方途である（と信じられている）ならば、芸術は当然、「生命」の表現」でなくてはならない。鈴木氏はこの例として、川路流虹が自らの口語詩運動について、「口語詩は内的リズムの表現であるとし、＜「適切な言葉」は、我らの「生命」をいかほどまでに表しているかという事に帰着する¹²⁾>」と述べたことを挙げている。精神世界に「生命」

(本質)があるとする言説が大正期に特徴的なものであることは既に述べてきた通りだが、文学の世界では特に、その「生命」が「言葉」によって体现される、或いは体现されねばならない、と考えられていたことがここからうかがえる¹³⁾。

同じことを読者の側から説いたものが、阿部次郎の「読書の意義とその利弊害¹⁴⁾」の主張だろう。

又書を読むについて特に注意することを要するは言葉の意味である。言葉はたゞ響きにすぎない。吾々にとつて重要なのは、その言葉の意味する事柄若しくは感情である。(中略)思想は生命である。言葉は唯これを暗示する一つの手段に過ぎない。正確に言葉の現在の意味を掴むこと——これも亦著者の真精神に参加するための欠くべからざる条件である。

「言葉」は、「著者の真精神」や「思想」、つまり「生命」を表しているから、「手段」としての表層の「響き」にまどわされずその「生命」に到達しなければならない、という主旨である。「言葉」に対する強烈な信頼感——換言すれば、「言葉」は発語者の意図を十全に表したものであるとして、その内包された「意味」を極端に重視する発想が、ここに見て取れるだろう。「薮の中」の語り手たちが、肉体(外)よりも精神(内)の問題を重視し、その精神を常に「言葉」から読みとっていたことと、この発想はきれいに重なっている。

再び「薮の中」に戻って、語り手たちの「言葉」への信頼が表れた箇所を挙げてみよう。まず多裏丸は、女の「言葉」に促されて男を殺した人間であったし、「お為ごかしの言葉だけでも」人が殺せると語る人間でもあった。真砂はまた、聞こえないはずの夫の言葉(「殺せ」)を頼りに夫を殺す人間であった。さらに武弘は、その「呪はしい言葉」ゆえに妻を恨み、その好ましい「言葉」のためだけに盗人を許そうという人間であった。また彼は、事件当時は口に笹の落葉をつめられて言葉を発することができず、そのために、「巧妙」に「言葉」を操る盗人に妻を奪われかけたのだとも言える。

語り手たちはみな、「言葉」に相手の本当の精神(「生命」)を読み取っている。いや、「言葉」がそういうものであると信じたところに、これらの語りが成立しているのである。

「言葉」に対するこのような発想は、「薮の中」の「言葉」の内部に「事実」または「真実」が潜むはずだと考える読者の発想とも極めてよく似ている。各語りを、語り手(登場人物)の肉声として見る立場の読者にとっては、「言葉」は「事実」を内包するはずのものと考えられたのだろうし、小説全体を作者の肉声と見る立場の読者にとっては、小説の「言葉」が、「懷疑主義」といった「真実」を内包するはずのものと考えられたのだろう。とすれば、小説から唯一絶対の「事実」や「真実」を導こうとする読者の求心力も、「薮の中」の各語りも同様に、「言葉」の内容への信頼という価値観に貫かれているということになる。読者の求心力を無意識のうちに呼びさまし、発動させた第三の要因はこれである。

7.

人間を「肉体」と「精神」の二つに分けて説明し、「精神」の方を偏重する価値観と、「言葉」を「響き」（表現）と「意味」（内容）の二つに分けて説明し、「意味」を偏重する価値観——。今でも、外に表れたものは仮象で本質は内に隠れているという言説が、いかに広くはびこっていることか。芸能人の素顔、凶悪犯の意外な内面¹⁵⁾、「作者の言いたかったこと」を語る映画解説、「テーマ」を読み取ることを生徒に強いる国語教育——、むしろそのような言説しか語らせないような制度ができあがっている、と言うべきだろう。そして、そのような制度にあまりにも深くなじんでしまった今までの読者には、それを「藪の中」の言説として相対化することができず、逆にテキストの価値観と一体化して「事実」や「真実」を追求してきたのである。

だが、その結果は、あまりテキストの可能性を豊かに広げる、と言うものではなかったように思う。「1.」で、私は過去の論文の傾向を非常に大雑把にまとめてみたが、そんなことが可能なほど、これまで得られた「事実」と「真実」のパターンは似通っている。外は仮象で内に本質があるとする言説は、ファッショともいうべき排他性¹⁶⁾を呼び寄せることもあるのかもしれない。

しかし、「藪の中」に読者の求心力をあおる価値観が幾重にもしくまれているからといって、この小説そのものが、特定の言説空間に読者を封じこめる張本人なのだと、私は言いたいわけではない。そもそも、「藪の中」は読者の求心力をあおりつつも、自らは唯一絶対の解答に到りつかない。この事件を実体論的に考えた時、全ての語りの言葉を活かしながら一つの事件の像を組み立てることが絶対に不可能なのは、前に述べたとおりである。それでも敢えて「真相」に到りつこうとすれば、読者は個人的な価値観をそこにもちこまねばならない。「死霊は生者のように、現世に利害を持っていない」から「真実を語っている¹⁷⁾」とか、真砂の語りは「いかにも女の云いそうな」「辻褃の合わぬ¹⁸⁾」ものだから信じられないとかいう価値観が、これまで多くの論者に支持されてきたが、それらは鏡のように論者自身を映し出すのみ¹⁹⁾で、「藪の中」からはかけ離れている。

とすれば、逆にこの小説は、人間の「肉体」や言葉の「響き」（表現）に比べて「精神」や「意味」（内容）を偏重するやり方では解決のつかない事態のあることを示している、と読むこともできるだろう。「藪の中」は一見、「肉体」「表現」（或いは「女」も）を抑圧する言説そのものである。しかしその反面、自らを未完成の姿にとどめることで、それらの言説を相対化する可能性も含んでいるわけである。

しかし、相対化と言っても、単にモノとして抑圧されてきた「肉体」「表現」「女」の復権を唱えるだけでは意味がない。これらは全て、＜精神/肉体＞＜内容/表現＞＜男/女＞という二項対立図式の片割れである。二項対立の考え方は、しばしば一方を抑圧することによってもう一方の権力を確認する機能を持つが、抑圧された項を復権させることは二つの項を入れ替える結果しか導かないだろう。果たしてこのような二項対立図式が可能であるのか、というところ

まで問い直さなくては、十分な相対化とは言えない。

8.

「言葉」が「内容」と「表現」に分けられるものではない、と言うことは、理屈の上では、既に大正の作家の共通認識であったようである。例えば、「藪の中」の発表と同年に行われた内容的価値論争では、当事者の菊池寛、里見弴共に、「内容即表現」を前提に据えている。しかし、その前提こそが論争の焦点になっているのも確かである。

まず菊池は、「芸術＝表現」とした上で、文芸作品は「芸術的表現」の価値とは別に人を感動させる立派な道德や思想を持つべきだとし、この一種の功利的、実用的な価値を「内容的価値²⁰⁾」と名付けた。これに対し里見は、菊池の論を「内容」に「表現」が与えられて作品ができるとする素人臭い「二元論²¹⁾」だとして反駁したのである。菊池は猛然と反論したが、確かに、「内容的価値」は「素材」に既に存在しているとし、その価値を「芸術的価値」より尊いものとする菊池の論は、結局のところ<内容/表現>の「二元論」と変わらないように見える。では里見はそれを脱しているかと言うとそうでもなく、彼は同時期に連載中であった「文芸管見²²⁾」で、「芸術とは、人の心の奥深く在るものを、引き出し、それに、目に見えたり耳に聞こえたりするやうな形を与える術」だという、「内容」に偏った「二元論」を唱えたり、「『内容』と『表現』とがピッタリと抱き合はない苦しみ」を語ったりしている。二人が創作者の立場から発言するせいかもしれないが、彼らにとって<内容/表現>の「二元論」から逃れることは、非常に難しかったのだろう。

芥川のこの論争に対する発言²³⁾はいくつかあるが、「内容即表現」の立場を標榜した以上に、とくに目立った主張は見られないようである。ただ、前節までの用語を用いて「内容」が「実」を志向するものであるとすれば、芥川の小説の言葉は、菊池の「実」からも里見の「実」からもかけ離れているように思える。菊池の「内容的価値」の主張は、要するに、「言葉」が「現実」に奉仕することを理想としたものであった。また、「『内容』と『表現』とがピッタリと抱き合はない」のは「人が嘘を覚えた」からだとする里見にとっては、「言葉」は「嘘」ではないこと、「事実」「真実」だけを語るべきものであった。とすれば、王朝物などという、「現実」とは縁のない、フィクションであるとの保証のついた小説の言葉は、いずれの「実」からも遠いと言えるのではないか。

もちろん、自然主義の命脈を柱とする日本の文壇では、芥川の小説はしばしば批判を受けた。例えば先に述べた論争中、菊池は、「芸術的価値」を有するばかりで「内容的価値」を持たない作品を、「うまいうまいと思ひながら、心を打たれない」として批判的に捉えているが、これは、同時代の作家たちが異口同音に芥川の小説に与えた評とも一致している。また、芥川が実生活や本心を作中にさらけださないうということも、常に批判的に取り沙汰されてきた。だが、このような批判こそ、芥川の小説の言葉が「実」から遠いことを物語ってはいないだろうか。当然ながら小説はフィクションであって、「言葉」が対象自体とは決して一致しないこと

を最大限に利用したシステム（「嘘」）である。だから「実」から離れているということは、「言葉」の、とくに小説の「言葉」の宿命でもあり、小説を成り立たしめる前提でもあるはずだ。

尤も、芥川が王朝物という、これは「実」ではないという保証付の小説を次第に書かなくなったことを、「実」への接近として論じることは可能かもしれない。だが、後期の小説は「事実」「現実」ではないという保証を棄てた代わりに、「意味」、或いは「内容」という「実」を崩壊させる傾向を持つように思う。「藪の中」は王朝物終了間際の作品だが、それが、さまざまな言説に依りつつそれを相対化して「意味」を奪うテキストであること、「言葉」が本質的な「意味」を表すものだという「意味」すら奪うテキストであることは既に述べたとおりである。また、晩年の「蜃気楼」を読むと、予想される意味やイメージが次々にずらされてしまう体験を読者は強いられるわけだが、これなどは、芥川の「意味」こわしの極北²⁴⁾に位置付けることができるだろう。

もちろん、「意味」の崩壊と言っても、そこに「表現」だけが残るということではないし、「内容」よりも「表現」が大切だということでもない。「言葉」を「内容」と「表現」とに分け、「表現」の内部に「意味」が隠されていることを予期する、二項対立国式に基づく価値観こそが崩壊するのである。

芥川の小説は、「藪の中」以外にも、読者の求心力をかきたてる性質を有しているものが多く、一見、すぐに「意味」を得られそうに感じられる。が、「藪の中」同様、それらの多くからは、逆に「意味」そのものの無効性に気づかされるのである。

それは、わかりやすいものを敢えてわからなくする読み方だと、批判する人もいるかもしれない。だが小説が「虚」の言葉からなる限り、小説の役割は、わかりやすい「意味」を与えることではなく、わからないものの存在、或いはわかってしまうことの危険を知らせることにあるのではあるまいか。例えば、我々をとりまく二項対立の言説²⁵⁾などは、ものごとをきわめてわかりやすいものに見せてくれるが、抑圧を前提とするその図式が万能でも普遍的でもないことが、小説テキストによって初めて理解し得る場合もあると思うのである。

また、「藪の中」を今回のような「意味」こわしの小説としてよむことは、わかりやすい「意味」を求めて小説を読む方法に対する一つの警鐘にもなると思うが、いかがであろうか。

(H 9・9 脱稿)

註

- 1) 小説前半の語りの連鎖については、既に平成6年日本近代文学会秋季大会の研究発表で指摘している。
- 2) 畑中基紀氏は、「『藪の中』——読むことと論ずることの間に——」（『国文学研究』H 6・10）で、初めの4つの語りが語り手たちの「推断」の累積であることを指摘し、「その事件は因果関係によって必ず（再）構成可能であるという情報を暗に発信し、解釈を命ずる」と述べている。
- 3) 「2.」末で、語りの求心力の存在が読者の求心力を助長すると述べたが、その語りの求心力が中途半端

にとぎれていることが、かえってそれを完成させようとする欲望をそそののだとも言えよう。

- 4) 「懷疑主義」という用語を用いたのは、室生犀星（『芥川龍之介の人と作（上）』三笠書房 S18・4刊）だが、吉田精一の論にも、「作家の懷疑的な人生観」（『芥川龍之介』（S17・12）との言葉が見える。このような「藪の中」観は、「結局は主観的にエゴイストチックしかその人生を生きられない、相対化され、それゆえに多様化されてしまった近代個人主義に基づく人生の認識」を見る海老井英次氏の論（『芥川龍之介論放——自己覚醒から解体へ』桜楓社 S63・2刊）などに脈々と受け継がれていると私は考える。
- 6) 「昭和学院短期大学紀要」H2・3。コードの検証という点では、和田敦彦氏が「『藪の中』論の方法——読書行為の一環として」（『国文学研究』H2・10。同氏著『読むということ——テキストと読書の理論から』ひつじ書房 H9・10刊にも所収と聞く。）で、「すべての論の基底にあるのは、我々がどの人物の話をどれだけ信じるか」だという立場から試みているのも参考になる。
また、女をモノと見なす視線は、高橋博史氏（同氏著『芥川文学の発生と模索——「芋粥」から「六の宮の姫君」まで』至文堂 H9・5刊）も多襄丸について認めている。
- 7) 佐々木雅彦氏は「『藪の中』捜査——真砂の場合」（『比較文学年誌』S59・3）で、「巫女の口を借りたる死霊の物語」の巫女は「ありえた事実、ありうべき真実をきわめて生々と再構成（想像）してみせたまで」なのだと言っている。巫女に物語を作ることが可能ならば、他の登場人物による物語づくり——というより、他の登場人物の名を借りた「編集者」による物語づくりも可能ではないかと私は考えてみた。巫女が「武弘」の名を借りて物語を語ったようにである。
- 8) 木股知史氏「<もう一つ別の物語>——『藪の中』をめぐる——」（『日本文学』H6・11）
- 9) 河出書房新社 H7・3刊。以下、注記のない引用文は、鈴木氏「『大正生命主義』何か」よりのもの。
- 10) 「朦朧たる時代<生命（ライフ）>の哲学」。
- 11) 北村透谷「内部生命論」（M26・5）。
なお、ここでは「生命主義」の精神偏重の側面のみを見たが、「生命」という語の多義性から、逆に肉体を受んじる言説も可能であることは確認しておきたい。
- 12) 『路傍の花』（M43・9刊）。
- 13) 『大正生命主義と現代』には、他にも島崎藤村の生命主義について紅野謙介氏、金子務氏の論考がある。
また、芥川龍之介自身も「文芸一般論」（T13・9～T14・5）中で、たとえ作品の「思想」が古びても、その「生命の火の燃えてゐる以上」「文芸的価値」は古びないと論じているが、これも「生命」と「言葉」の関連を信じる言説に加えることができるだろう。
- 14) 『人格主義』（承前）所収。
- 15) 拙稿「六の宮の姫君——<内面>の「物語」の蹟き——」（『文学』H8・1）では、「六の宮の姫君」を、<内面>と出来事が必ずしもつながらないこと、<内面>が結果を解釈することによって後から生じることを暴く物語として読んでみた。
- 16) 鈴木貞美氏は、大正生命主義が昭和に入って「民族の生命」を唱える思想として「不幸な形で戦争の中で蘇っ」たことを述べている。（『大正生命主義研究の今』、『大正生命主義と現在』所収）。これは極端な例かもしれないが、芥川の研究においても、作家の悲劇的な生涯に収斂させる形で各作品を解釈する制度が根強く残っており、芥川研究の排他性を他の近代文学研究者から指摘されることもある。自ら戒めたい点である。
- 17) 大岡昇平「芥川龍之介を弁護する——事実と小説の間——」（『中央公論』S46・12）。
- 18) 中村光夫「『藪の中』から」（『すばる』S45・6）。
- 19) 和田敦彦氏（注（6）参照）は、「事実」や「真実」を語る「藪の中」論の根拠に「せいぜい日常的な、としか言いようのない漠然とした基準」がしばしば折り込まれていることを指摘している。論者を日常的に支えている価値観が、「藪の中」を鏡にして現れたということだろう。
- 20) 「文芸作品の内容的価値」（『新潮』T11・7）。
- 21) 「菊池寛氏の『文芸作品の内容的価値』を駁す」（『改造』T11・8）。
- 22) T11・1～10「改造」誌上に連載。菊池への駁論（注（21）参照）も、この論の一部として掲載されている。
- 23) 講演筆記「文芸雑感」（T11・11・18 学習院特別邦語大会にて）では、「ファウスト」の一節“Gru ist all e Theorie, Und grun des Lebens goldner Baum”を例に挙げ、「世間では普通にこの二行の内容は理

論はつまらんもの、生活は難有いものと云ふことだと解釈してゐる、同時に灰色だの、黄金色だの、生活の樹だのと云ふのは皆装飾、即ち形式だと解釈してゐる。併しながらこの内容と形式の考へは当たつてゐない。これでは思想と言葉との区別にしかありません。」として、「形式と内容の表現の不即不離」を述べている。また、「文芸一般論」(承前)や、より以前の「芸術その他」(T 8・11)にも「内容」と「形式」の関係について考察した箇所があり、芥川にとってもこれが生涯の関心事であつたことはうかがえる。

- 24) 拙稿「『蟹気楼』——<詩的精神>の達成について——」(『国文学研究』H 3・6)をご覧いただけると幸いです。
- 25) 拙稿「二項対立図式への疑問——「蜘蛛の糸」の試み——」(『文芸と批評』H 9・5)では、「蜘蛛の糸」を二項対立言説を揺るがす物語として読んでみた。ご覧いただけると幸いです。

〔付記〕 本項は、平成6年日本近代文学会秋季大会(10月22日、お茶の水女子大学にて)での口頭発表をもとに、大幅に加筆訂正を行ったものである。執筆に当たって、多くの方々よりご教示や激励のお言葉を賜った。この場を借りて感謝の意を表したい。

(本学非常勤講師)